

学校運営の舵を取るトップに聞く

# LEADERS

File 05 竹川 威

Takeshi Takekawa

八千代松陰中学・高校 校長



たけかわ・たけし  
1955年生まれ。早稲田大学教育学部卒業後、79年八千代松陰高校英語科教諭。第1学年主任(81年)、生徒主任(85年)、併設中学校教頭(93年)、中学・高校副校長(2008年)を経て、11年より現職。15年学校法人八千代松陰学園理事長兼任。

「日本一学校らしい学校に」  
その「学校らしさ」とは何かを  
教職員には考えてもらいたい

まとめ／堀水潤一 撮影／吉永智彦

## 創立時のスピリットが 今も息づく学校

「積極的に学外に出て広報をしよう」と先生方をけしかけるいっぽう、校長である私が表に立つことはあまりありません。目立つのが苦手という性分もありますが、学校の象徴として前面に出るのは、創立者・山口久ただけで十分と考えているからです。日本の教育界・アマチュアスポーツ界のリーダー的存在であった山口先生が本校を設立したのは1978年。その2年めに赴任した私は、「俺は作った。発展はお前らがやれ」という強い言葉を受け、先輩教員の手荒い指導のもと仕事に没頭しました。郊外の新設校で知名度はゼロ。他校生が口にする心ない言葉に劣等感を抱き、身を小さくする生徒を見たときの屈辱が原動力になりました。そのため、創部2年めの野球部とサッカー部が全国大会に出場するという奇跡的な体験がもたらした、生徒の自信にあふれた表情を今も忘れることはありません。それらを契機に学校の知名度は上がり、受験者数は急増。紆余曲折の時期を乗りこえ、文武両道の進学校として発展してきました。その間も、創立時のスピリットが絶えたことはありません。創立者は、「記憶より考える教育と、個人のもち味を生かす教育を強調する」「国際感覚に富む幅の広い勇気ある青年を歓迎する」などの言葉を残していますが、それらは現代にこそ求められること。習熟度別クラスや選択科目制にこだわっているのも、グローバル教育を徹底している

のも、そうした原点があるからです。  
**上に判断を委ねる  
役割では意味がない**

管理職になってからしたことの一つに自己裁量権の拡大があります。というのも、かつて私が若くして学年主任を任せられたとき、ようやく学年で固まった決定事項を教務主任や管理職におうかがいを立てるたび、異なる意見が出ては振り出しに戻ることがありました。10人に聞けば10通りの考えがありまるとまじりません。目上を立てることは当然として、何が困るかと言えば、生徒に即答できないことです。学校運営について尋ねられても、「うん、考えとくよ」と曖昧に返事をするむなしさ。だからこそ、校長になった今、すべてを現場に任せようとしています。たとえ担当者が判断したことが、後に自分の意見と違っていたことがわかったとしても、その結論は自分が下したものであることにしています。せつかくの役職も、常に上に判断を委ねるようでは、責任が伴わず、存在する意味がありません。今、掲げているスローガンは「日本一学校らしい学校にしよう」というもの。先生方からは、「学校らしさって何ですか?」と尋ねられますが、「それを考えるのが君たちだろう。私の仕事はそれをまとめること」と答えています。そのため、酒の席などでも、ああでもない、こうでもない」と語り合っているようです。私も呼びだされるが多々ありますが、すごい熱量。本学が自慢できるのは、施設よりも何よりも、生徒であり、教師です。

八千代松陰中学・高校  
(千葉・私立)

1978年八千代松陰高校創立。82年八千代松陰中学校を併設し中高一貫校に。徹底した習熟度別授業(レッスンルーム)や大幅な選択制授業で知られる。学校敷地面積は東京ドーム3つ分に相当する約15万㎡。2007年、創立30周年記念事業の一環として校舎を全面的に建て替える。生徒数は中学校710人、高校2242人(2015年度)。